

土地と人間(前半):「大阪のおばちゃん」と東京

藤井 聡

少々不謹慎にも思えるのでこれまで公言してはこなかったものの、ここ最近、どうしても自分自身がそうなのではないかと思えてならない一つの心情がある。それが、(平坂君が塾生通信8月号で触れていた)小生が発言者塾の塾生の皆と過ごした酒場で申し上げていた「九州ファン」なる九州という土地に対するある種の心情である。「ファン」という言葉はそもそも「ファナティック」にその語源を持ち、ファナティックとは狂信的、熱狂的という意であるから、九州に対して狂信的、熱狂的でございます、と公言することについて、羞恥の念と九州の皆様に対する何とも言えない申し訳なさを感じるところである。ただし、九州という土地に対して、「狂信的、熱狂的な心情」とも言えそうな気分を抱いていることは事実であるし、その心情についていくつかの点を語ってみることにそれなりの意味があるようにも思えるので、ここは恥を忍んでそのことについて書き記してみたいと思う。

いうまでもなく、この九州という土地に対する特殊な感情は、そのおおよそが個人的な経験、すなわち、過去に出会った幾人かの九州の人々に対する個人的な思いに基づくものである。ここでは、この九州の人々に対する個人的な思いについて(抽象的な次元においてではあるが)語ってみようと思うのだが、それを語るためには、どうしても、筆者個人の経歴を話さねばならないように思う。ついては、まったくもって個人的な事で恐縮であるが、そのあたりから、述べてみたいと思う。

筆者は、生まれは奈良で、大阪の高校に通い、京都の大学に入学して以降数年前までその大学に勤めていた、いうならば関西で生まれ育った人間である。当時は関西から外に出ることについて大きな抵抗感があり、生涯、関西で過ごすことを心底願っていた。その願いは、幼少の頃は特に大きなものではなかったが、年を経るにつれてますます大きなものとなっていった。とりわけ、東京なる場所に居を移すことに大きな抵抗があった。東京出身の方には全くもって申し訳ないが(しかも、おまえは今、東京に住んでいるではないかという声が聞こえてきそうであるが)、当時の心情を思い起こせば、東京なる場所で暮らすことについて、何とも言えないある種の「気色の悪さ」を感じていたことを覚えている。これはまったく筆者の想像であるのだが、東京に対するこの「気色の悪さ」は、関西出身の者における非常に平均的な心情であるように思う。逆に言うなら、この東京に対する気色の悪さをどの程度感じているかが、その人間がどの程度「関西の人間」なのかについて推し量るための、それなりに精度の高い尺度であるとすら言えるように思う。

では、なぜ「気色悪い」のかといえれば、これがなかなか説明するのが難しい。ただし、この気色悪さを説明せずして、冒頭で述べた、九州に対する筆者の思いを語ることも難しいようにも思うので、それを説明してみたいと思う。

関西という場所には、おしなべて言ってある種の「一体感」が存在している。たとえば、大阪周辺の地域には、「大阪のおばちゃん」という「抽象概念」がある。この「大阪のおば

ちゃん(あるいは、おばはん)」は、関西の大阪近辺には、いたるところに偏在している。「大阪のおばちゃん」なる存在は、概して恐ろしく傲慢で、身勝手な存在である。典型的には、電車の中では傍若無人に振る舞い、「着座」するためには周りを顧みずに驚くほど素早く座席に移動する。他者の状況など全く意に関せず、誰にでもやたらと話かけ、干渉し、一人でけたたましく笑う。そういった利己的行動を繰り返す存在なのであるが、筆者が思春期の頃には、その公共空間内の傍若無人な行動にしばしば憤りを感じていたことを覚えている。ところがこの大阪のおばちゃん、決して、社会的に否定された存在ではない。関西弁で言うならば「しゃーないなあ」とみなされる、いわば「憎めない存在」であり、場合によっては「愛される」存在ですらある(筆者には、「愛される存在」とまで見なすのは、いかなるものか、という気もするのであるが)。おそらくは、この「大阪のおばちゃん」とは、どこかで、自分の家族や親戚の中にいる中年女性、あるいは、近所で子供のころにあれこれと世話を見てもらった中年女性の本質的な部分を抽出して構成されている概念であるように思う(当然ながら、多くの場合、典型的な原型は「母」であろう)。

無論、この「大阪のおばちゃん」という概念は、大阪を中心とした地域に妥当する概念であって、京都や神戸では必ずしも通用しないものであると思われるのだが、こういう概念が、地域的に共有されているということそのものが、関西のそれぞれの地域に、ある種の「一体感」があることの証左であるように思う。それは、もう少し別の角度から言うならば、コミュニティや社交がそれなりに存在していることを端的に表しているように思う。

さて、この「一体感」を生み出す源となるコミュニティや社交は、(塾生通信の8月号で川端君が論じていたように)「手段」としても「目的」としても存在している。筆者らにとって、「大阪のおばちゃん」たる母や親戚や近所の中年女性たちは、いろいろな事柄を教えてくれたり、いろいろな面倒を見てくれたり、そして場合によっては、怒られたりする存在である、という点において「手段」としても誠に有益な存在である。しかし、「大阪のおばちゃん」を「手段」として是認している者はまず居ないように思う。かく言う筆者も、こう語る今の瞬間まで「大阪のおばちゃん」の手段性について考えてみたことも無かった。にも関わらず、「大阪のおばちゃん」が社会的に是認されているのは「大阪のおばちゃん」自体が、関西の人々にとって、ある種の運命共同体の一部として存在しているからではないかと思える。おおざっぱに言って、誰にとっても母が母であるように、関西の人間にとって「大阪のおばちゃん」は「大阪のおばちゃん」なのである。いわば、「大阪のおばちゃん」を「手段」としてではなく「目的」そのものとして是認している社会、それが、(大阪周辺の)関西の社会なのである。

ところが、少し外部の情報に触れるだけで、こういうローカルな感覚はそれがローカルにしか通用しないことは容易に理解できるところとなる。それ故、この一体感のまま生きていきたいという思いを持つ者は、関西の外に出たくない、と考える傾向が強い。関西に居住していた頃の筆者のおおよその気持ちは、そのようなものであった。

とはいえ、異質なものであったとしても、どの地域にいてもそのローカル性が存在するであろうことは、十分に理解できることである。そして、そういう土地土地のローカ

ル性には、肌馴染むものもあるだろうし馴染まないものもあるだろうが、それがその土地のローカル性であるのなら、好き嫌いにかかわらず、その土地に住む以上はそのローカル性に身を任せるのはその土地に対する礼儀であろう、という思いを持っていたように思う。それ故、関西の外に積極的に出て行こうという思いはないものの、何かの具合で出て行くことになったとしても、それは致し方あるまい、と感じていた。

ただし、筆者は、東京にだけは、どうしても行きたくは無かった。言うまでもなく、その理由は、先に述べたように、東京が「気色悪い」土地に思えたからである。

なぜ、「気色悪い」のか——、それは、東京という土地のローカル性が気色悪いのではない。東京という土地に、ローカル性が存在していないということそれ自体を、気色悪いと感じていたのである。

ローカル性の欠如とは、その土地の一体感の欠如を意味し、それはその土地のコミュニティと社交の欠如を意味する。

長らく関西に住んでいた筆者にとって、ある種の一体感と共に、あるいは、その土地のコミュニティと一体化して暮らしていくことは当然のことであった。仮にその中に、どうしようもない「大阪のおばちゃん」的な人物が多数存在していたとしても、それは、筆者の人格とどこかで繋がっているのであった。だからこそ、筆者にとって、コミュニティの中で、ある種の社会的歴史的な一体感を携えているということそのものが「人間の条件」であると、非言語的にではあったがはっきりと認識していたのであった。だからこそ、ローカル性、一体感、コミュニティが存在しないにも関わらず暮らしているという人々が、何か「人間以外」の不気味な存在の様に思っていたのであった。それが、筆者が感じていた、東京に対する「気色の悪さ」であり、そして、筆者に限らず（おそらくは）平均的な関西の人間が東京に対して抱いているであろう気分なのである——。

はたして、筆者は、東京に移り住んで、もう6年目になる。家族と共に暮らし、いつも買い物に行く近所の万屋もあり、子供たちを通じて近所ともつきあいができ、仕事関係のつきあいも広がった。決して寂しいわけではないし、それぞれの共同体の中でそれなりの一体感を感じてはいる。おそらくは、そのためでもあるのだろう、いつのまにか、東京を、気色悪いと日々感ずることは無くなってしまった。

しかし、それぞれの共同体は共同体として機能しているとしても、その共同体は、いずれも、東京のどの「土地」にも根ざしてはいない。そして、「土地」に根ざしていない以上、歴史も十分に長いものとはなり得ていない。言うならば、かつて関西で感じていた「土地」に関わる、社会的歴史的な一体感は、やはり、無い、としか言いようがないのである。

ただし、それが無いことは、実は、大層「心地よい」事でもあった。かつては、「大阪のおばちゃん」が如何に利己的に振る舞おうが、彼女は我々と一蓮托生の共同体構成員である以上、それは「しゃーないこと」として是認せねばならなかったのであった。しかし、東京では、彼女たちを是認する必要など何一つない。ここでは、卑近な例として「大阪のおばちゃん」を引き合いに出しているが、関西には、ありとあらゆる大小様々な「悪行」を「しゃーないこと」として是認しつつ、その「悪」と共に暮らしていかなければならな

いのであったが、東京では、それらをあっさり、「悪」と見なして、切り捨てることができる。一言で言うならば、これは、田舎と都会の違い、あるいは、ゲゼルシャフトとゲマインシャフトとの違い、とも言えるのであろうが、この違いは、筆者にとっては衝撃的であった。それは主観的には「楽」でもあるのだが、「悪」を排して「善」をなすための「義」が、なんともあっさりと通る驚くべき状況であるとも感じたのであった。

ただし、都会、あるいは、ゲゼルシャフトが如何に「楽」なものであっても、そこでの暮らしは、随分と人を「不安」に陥れるものであることは間違いない。相当程度の心構えで臨まなければ、ついつい不健全な人格、共同体となってしまうように思える。そして、伝統とは無縁に議論される「善」がイデオロギーに染まりやすいのは必然ですらある以上、「義」を通すことが如何に容易くとも、それが伝統とは無縁に浮遊するのであるのなら、必然的に、精神の宿らぬ単なる理屈に成り下がることもなるであろう。それ故やはり、地縁なくしてコミュニティの健全なる安定化は難しいように思えるのである。

だとしたら、関西の様にコミュニティと社交と地域的一体感を保ちつつ、しかも、悪をそのままの形で是認するのでもなく、「義」を通す方途があるとするなら、それが最も望ましいに違いない。この様な土地の具体的な姿を、筆者は、「九州」に見たのであった――。

「九州」を語るための前段だけで、相当程度の文字数を費やしてしまった。紙面の都合もあることから、中途半端な形で恐縮ではあるが、ここからの話は、次号にて記述させていただきたいと思う。